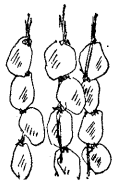
〔史料紹介〕

渡部平太夫・渡部勝之助『桑名日記・柏崎日記』（その四）

松川由紀子



同年十月二十六日

医者四ツ頃参りくれ、誠にお軽く御座候。ちと細かなれどもかたき症にて至極よろしきたちにて、少しも御気遣ひなしと申候。

同年十月二十七日

ほうそう大分水うみ致し、気味能地ばれ参り候。只やかましく面倒にて困り入候。申出したることは如何様申ても聞分無之。今朝も三味線がほしいから、おゆきと町へ買にゆかふと申。小林に子供の三味有之。借て参り先それでたんのふ致し候。

同年十一月二十八日

真吾左の眼胎毒にて目はれ涙出て細目に見へ候へども、痛むやらふさぎ通し。右の眼までふさぎ通し少しもお菊の手離れず、時々大おこり致し誠に困り入り申候。万一目にさわり候ては一大事也。お菊大心配昼夜一心不乱に介抱いたし候。七ツ頃泊りに出る。お六六ツ過に枕持て泊りにまいり暫くふとんあたためて先へ寝せる。四ツ過手水やり抱き寝る。今晩甚寒くしがみついてねる。八ツ頃に又手水に起る。ほうそう後手水近くなり当番所にて不調法致そうかと甚心配也。

同年十一月三十日

真吾胎毒だんだんふえ、左の目のぐるりより耳あたまへかけ岩の様になり。甚かゆがり両眼より涙出、首を苦しみもだへ、時々大だゞおこし昼夜泣声止む時なし。おきく懐へ入立通し飯を食べ候間も立て居り候位也。脇の者まで骨身をけづられるよう也。実にむごくもあり余りだだおこし候時はにくらしくもあり、かやうに困り候こと初めて也。

同年十二月二日

今朝も学校頼み不出、早く起お六きものきせ焚付る。お六お向へ行ふと申、未だ雪明け来らず行れぬと申ても聞ずに出る。お

きくいろいろにだましてもきかず、雪の中へほり出してくれと申、お六だいて入口塀の外雪の中へ仰のけに投げてくる。余り玉げ候や早速泣き出さず、夫より泣声聞ゆるけれどかまわんで戸をしめてしらぬふりして居る。その内部屋の与七雪明けに来て、これも玉げ起してやる。その音でお向の叔母さ飛で出、内へつれてゆきなさる。お向でまだ火燵出来ずつめたへから行でないと申ても聞ず、お菊近頃真吾抱きづめお六つきどころなく、お向へ斗行たがり候も尤也。されどもどういうことか、お菊お向へやること甚嫌ひや。お向の衆はろく随分可愛がり被下候。真吾次第に悪く今日は大分疲れ出乳もろくに給べず、只かゆがりお菊額のあたり叩き通し。少しやめると叩いてくれとそこらへこすり付、私は湯へ入れやうと申、お菊は医者が湯は当分見合うと申故医者に見て貰ひよろしと申せば入れ様と申、毎日争ひ居候。医者に参りくれと申遣も、居候へども不参、今夜は別にやかましく、おきく六七月以来髪にくしの歯も入れずかねもつけず、真吾一色にかかり通し也。おさとこそ大迷惑朝茶漬たべあと仕舞、昼飯米をかしどふやらこふやら汁も煮る。朝のこと仕舞うと直に昼になり昼のことしまふと晩になり晩も茶漬也。あとしまひ寝所迄しいて帰る。十一にしてよく致し毎日ほめやり候。

一八四三年一月四日

お六びんこを直中結ふてやる。お民と二人にてあくれ甚やかましく困り入候。お六の唄「いかに御倹約だとふて、紙このよもじノウ。ぬれてやぶけて、おかんちょが見ゆるノウ」ろくなことは覚ひ不申。

同年三月二日

おきくとかくよろしからず、時々不機嫌になり食事一向不進困り入候。八ツ過よりおゆき参りくれ、ひな様に御膳を拵ふてくれ候。何につけても両人の病人目もあてられぬ有様困り入候。

同年五月二日（お禄四歳、真吾一歳）

おきく又舌大ただれに成り食事致しかね、箸を手に持涙ぼとぼとこぼしておる。おれは不給死んでもよけれども真吾がむごくてならんと申、誠に変な病にていかんとも致し難し。

同年五月二十九日

お六この頃は別してめろめろと泣き出し、今日昼過品川の見へ候時、私の側に立はだかり居候間、すわり時宜をしやれと申せば泣出し御向へ馳け行。大だだ起し候に付、品川被帰候に付直にお向へおきくも私も参り、叔母さと三人がかりにて、ちりげへ灸を十一すえてやり、それよりおとなしくなり泣きくたぶれ昼寝いたし候。

同年十二月二十七日

お向よりお歳暮こんにやく二つ、江戸みかん十斗、お六の所へ前掛と道中双六、真吾にせんべい被下。お六大悦。

一八四四年一月一日

おろくは着物先日織り候島を着て、前髪にかせ掛け、かんざしも差し、身拵ひ出来上り候処也。それより雑煮祝ふ。私六つおききく五つお六三つ真吾は一つ、守り四つ也。真吾も初て去年御遣し被下候島の着物着せる。誠に能似合ひなか〳〵大男に成り候。

同年三月十五日

おろく、真吾久しぶりにて今朝骨の少き身所の沢山成る肴沢山たべ大悦いたし候。肴は皆鯛と平目也。

同年六月九日（お禄五歳、真吾二歳）

大暑、目もくらやむ様にて、内に居所なし。品川より涼みながら焼跡見物、夫より祇園参詣は如何と申来る。お六おどり上りよろこぶ。早速支度して出かける。真吾も守りも行。祇園神社へ曲り角に鳥居有之、ここまでにて消へ候。それより参詣致す。調度灯燈付た処也。真吾神仏大信心者、天王の堂へ上り候処、ちやんと坐り、両手を合せ鼻の所へ当て、暫く口の内にて何か唱ひ、夫より両手を突き立つ。平に拝を致し、か様致すこと何方にても三度也。

同年七月二十日

おきく私の三尺手拭白麻也、これを真吾にふんどししめてやり候所大悦び、いろいろの身振りして見せ大笑腹筋より候。

同年十一月十五日

栗本の忰、金子の二男元服その他所々に上下着、髪置祝ひ有之候。内でも真吾の髪置致度とおきく春頃より願ひ居り候へども、上着一枚出来かね候。祝ひ表向不致、今日昼赤まゝたき神酒上て置申候。初幟さへ致さぬもの、髪置など致さずともよろしきと、おきくなだめ置申候。上下着の節は桑名へ参り賑々しく致し度と祈居候。

同年十二月三十日

真吾六ツ半頃まで不眠に騒ぎ居り候様子。かねて駒蔵にあつらひ置し真吾脇ざし出来上り持て参る。鞘は朱塗り、目貫は内の紋所也。至極能出来申候。真吾の悦びなかなか筆紙に尽しがたし。昨夕より身を少しも不放、おどり上り悦び申候。

一八四五年一月十四日

真吾申にはボチヤにも髪イツテ〳〵と申に付、芥子大分延び候間、少しづゝつまみ、両方より合せて小さなまげに結ふてやり候。蝶々のとまり居候形にて、なかなか面白し、大悦也。大ひやうげもの、内にさへ居れば私共を色々のことを片言交りに申、顔付をいろいろにして見せ、笑はせ居り申候。

同年二月三十日

雛を例の通り部屋へ飾る。お隣の嘉子方もお借り申す。子供悦び真吾人形を守りするとて持遊ぶ。

同年五月五日（お禄六歳、真吾三歳）

真吾外々の幟を見て余り羨敷がり候に付、一昨日か紙幟小さく拵ふてやる。大歓にて庭へ立て置く也。

同年九月十三日

日暮に真吾、お六に送られ泊りに来る。少しの間負んで庭へ出て遊せ候。ちとくもり月不見。六ツ過に真吾抱いて寝る。三ガブシ二つ三つ唄ふ。夫より昔を語れと申、猿の話半分にて眠り付申候。誠におとなしく諸人のほめ者也。先第一喰ひものねだりは決て不致、その代り持遊を持遊ぶ事は大好きなり。

同年十月二十二日

少女（二女お綸、同年九月五日生）誠におとなしく終日イサに入り眠り通し也。真吾近頃次第にわんぱくに成り、悪まれ口たゝき何をいふておどしても口答へなどいた

して、手にも足にもおへぬ様に成り候。三度つゞ汁かけ飯四五ぜんづつかつ込喰ひぶとり、顔はイミわれそふに成り申候。香の物は余り好ズ。汁は三度づつなくては承知いたさず、奇妙なる奴なり。

同年十一月三日

真吾昨年髪置も致さず、当年はお六紐解きに付、両人の祝ひ近々可致とて両人の着物先頃より取かかり居候。勿論上は着は両人とも春中拵ひ置候間下着斗也。両人の下着お菊のものをこわして拵ふ。おろくの分は、江川の御古の由。只今拵ひ最中也。真吾の分は出来て仕廻ふ。おりんの七夜の祝ひも延し置。是も近日致す積り也。おりんの着物は御隣より御祝ひ被下。夫を拵ふて着せるとて女に先頃より拵はせ、漸々の事にて出来上りそふ也。勿論絹裏也。今日お六の帯紬嶋にて引こくり申候。一分程かかり真吾の帯は春中紬嶋にて拵ひ置候。当暮は大分の借金甚心配也。

同年十一月二十日

昨夜は小女別て咳強く出候て、時々息止る様にて、お菊ろくに眠らずに居り候由、されども格別弱り候様子も無之、お役所へ出る。四ツ半頃おろく御役所へ参り一寸来てくんなへと申す。無程行。何事と存候処お菊泣声にて小女が死にましたと申、夫はどふいふことと見れば、もはや口を開き目を閉じ、如何とも可致様なし。医者の薬のと騒ぎ、医者も参り救命丸も吹き込み候へども、とても埒明き不申、終にそのまゝに成り申候。全体生れ方弱く候や、大声出して泣くこともなし。兄弟の内一番おとなしいとてお菊別て可愛がり候処、十日余も咳出、乳もろくに不欲、次第弱りの処へ痰せきあげてそのままに成り候事と被存候。不足もなき子供なれども只むごつけなく残念に存候。

同年十二月一日

真吾妙に昼の内は決て乳とも申出さず、おきくの側へも寄りつかず、終日お六とねゝ様事して遊ぶ。

同年十二月九日

真吾昼の内は替りなけれど、夜は大違ひあまへくさり、お菊寝付ても度々起る。乳をすさぶり通して居様と申、大着ものには困り入候。真吾申には、おれはもはや兄チヤではなへ、おりんが死だから、おれが又ねんねに成たのだ抔と、子供同土咄て少も恥しき様子なし。何もかも承知してあまへる故、甚にくらしけれども致方なし。

同年十二月二十八日

終日障子の切張、おきく年取り用意、両人の子供正月来るとて大楽しみ、小間物屋より歳暮に草双紙二冊貰ふ。子供の分る事作りたる故、読できかせろと申てねだり、もはや十ぺん斗も読む也。お菊私始め子供の正月着、別に不拵古物にて間に合せ、仕事一向無之、じゆばんのつくろい位のことにて、安楽の年の暮也。

一八四六年一月四日

七ツ時泊りに出る。真吾おれも泊りに行ふと申に付、おつかさが淋しいから、よしやれと色々申て漸承知致し不行。弁当済暮合にお六真吾負んで来る。どふしても聞んからつれて来たと申、合点の行ぬ奴にて内に居ては暮合にはお菊洗ひのけ仕廻ふのを待かねて、乳を飲む。何程旨きことやら少しも私と寝ることせず。然る所泊りの時離

れてくるのは、誠に奇妙な事也。夫よりこたついたし、寝まきあたためその内寝ころんで、昔し一つ言上ぬ内に眠り付、そのまゝに致し、五ツ過に起して小用やり抱て寝る。そのおとなしきことお菊に見せたき様也。夜中に一度夢中にて乳をさがし候間、ヲットサと寝て居るぜやと申せば、又のり出て寝る。

同年一月二十二日

お六、栗本へ子供の寄合に呼れて行。お六、紙大分勝てきたと歓。その代り新しき紙は少しに成。しわくちゃ斗に成。

同年一月三十日

今日よりお六に手習初めて為致候。

同年四月七日（お禄七歳）

先日吟味致候無宿長松と申盗賊些と尋落し有之、呼出し昼過に吟味に出る。真吾申にはオトツサア役所へ行なる、おれはどろぼふの吟味に行と申、おれも行て見てイヽカへと申、姉さと見にきやれと申て出る。直に後より真吾、お六と来る。当所吟味所は御座敷の脇に有之、御座敷より障子に穴をあけ、大勢のぞき見る事也。無程吟味初める。真吾障子の穴より見て居候。大声にて盗賊を呵り候へば、真吾何かお六と申合ふ音聞る也。相済と外の覗人と一同に逃て帰る。帰宅致候処、真吾申には、どろぼふはオトツサに叱られたけれども、笑てゐたぜと申て、一向恐しがらぬ也。いつそ拷問に致す所為見可申と存じ候。

同年五月六日（真吾四歳）

御隣にて御先祖の百年忌御法事被成候とて、お菊朝より御手伝に行。魚類の御料理のよし。両人つれ番神参詣に行。単物と襦袢にてよろし。真吾大悦びさっさと歩行き下宿へ行と親船三艘かゝり居、御回米小舟にて運ぶ。番神の坂去年は抱て登り候処、今度は手も引かんでくんなへと申て、二度休で上り私より却て丈夫なり。堂へ上り奥の院へ行。拝礼致す。真吾両手合せ、暫念じて時宜致し候。目をようして御くれなされましと申て、拝みやれと申聞せ置候故也。夫より堂の内額の絵など見せ、菓子売三四人居り候間、何を買ふてやろと申せば、何でもエヽものがエヽと申、二文どりあんころ買ふてやり、両人して給べて仕廻ふ。夫より堂を下り、海手の景色の能所へ行。芝草の上にて休足、今日は一向参詣少し。昨日は何程の参詣人やら、どこもかもち巻の皮だらけ也。暫気色詠める。目の下にて浜の女ども仰山に裸に成り、若芽を取る舟にても取て居り、引塩にていろ〳〵の岩も見る。弁当の懸ごにふきと鯛のあらを煮付たのと香の物入、三人にて給る。なか〳〵おゐしくて不残給て仕廻候。ぶら〳〵番神様の後ろ山を廻り、南の方へ出て又御堂の脇へ出る。真吾又遠くより拝んで来る。ビードロで拵ふたるポコン〳〵と鳴るもの買ふてくれとねだり、無拠一つづゝ買てやる。八文づゝ也。七ツ前に帰る。

同年六月八日

祇園祭礼にて十四日まで也。お六申には御陣屋にかたびら持ぬ者は、おれ斗栗本のお雪さおいせさなんぞは、三枚も四枚も持てゐなる抔と申て、そろ〳〵ねだり初り困り入申候。……例年の通り祇園にて今晩、陣内の若手ども、打揚大分こしらひ三十本

余も揚候よし也。真吾尼寺へちれて行ない〳〵と七ツ頃よりねだり、日暮てつれて行。

同年六月十七日

真吾七夕の船拵ふ所へ行。当七夕より真吾も交り銭を五文十文子供集めに来る也。真吾大悦び、おれも七夕祭に交った。もう大きくなったからだねへと申に付、それでも乳を呑むのはどふ云ことだと申せば、エエオトツサの馬鹿めがと申し、顔を赤くする也。

同年八月六日

暮合に真吾申には、余所の人は皆釣に行きなるけれど、ヲツトサはなぜ行きならんだろふと申、大笑也。此頃は色々不審尋ねる也。今日は御節句だに、なぜ雨が降るだろふ。花は木にどふしてなるのだろふ、おとつさはどふしておつかないのだろふ、などゝ申て妙な事斗申て笑せ居候。

同年八月二十三日

真吾ジボ取にちれてゐきないと申てねだりぬき、無拠両人つれてぶら〳〵出かけ、中浜山昨日の午前の山まで行。小さなのを二三十も取る。真吾大悦び、みんなおれの様なのだと申て、小ビクに入て悦ぶ。お六も大分取候。真吾松林の中へ入り、うす暗くなり気味悪くなり候哉、もふ帰りたいと申、そろ〳〵帰りにする。山通六ケ敷所はお六負んでやり、帰り道も大分負ぶ。七ツ前に帰り候。真吾は大分こりこり致し候様子也。茸取りの事誠に面白へけれども、遠くてこわいと申大分の坂斗り越し候故也。

同年九月二十日

真吾比頃は誠に大丈夫、大食致終日能遊び、喰物ねだり致し候事絶て無之。只悪たれ口は大分利出し、昨夜些小便シビリ。今朝おきくに呵られ候処、ソンナラモツトたれてやるぞと申し、誠に平気なもの也。女子と違ひ、めったに泣事無之。泣ても長泣はせず、折々ヒヨウゲロ利、笑わせ申候。此頃もおかつさ、チンボコの隣はキン玉、キン玉の隣は尻の穴だねへ、どうして尻に穴が有だろふ抔と申大笑仕り候。右に類し候事折々申出候也。

同年十一月十五日

四ツ半頃頼帰り候。真吾待兼居り、直に髪結てやり、お六にお弓の兄八十七迎へにやり、来ると直に真吾上下着せ、八十七に負せて大窪諏訪宮へ参詣致させ候。お六は刀持に行也。道悪しく大難儀の由也。早朝よりおゆきおきよ手伝ひながら参りくれ、叔母さ、お民も同様也。真吾の帰らぬ内に子供客の迎へに遣し、追々集り候、……子供ら大悦び騒ぐとも〳〵物音聞へず、真吾春以来の楽しみ、その悦び大方ならず、紋付着て上下大小指し候処、中〳〵大男に相成、ここの所桑名の御祖父様お婆様に見せ度とて、おきくつく〴〵詠め居申候。子供八ツ半頃迄に不残帰り候。夫より晩の家の騒ぎ也。短日故皆々立騒ぎ通し也。……お六終日使に所々へ飛びゆかされ。疲れ候哉五ツ過にこたつへ入眠る。真吾はおれがお祝ひだから、ねむたくなへと申して、お菊の帰る迄起て居候。勿論やかましく申事は無之、只ひようげ居り、唄ふやら踊りの真似いたし、或は紙にて何か折て遊ぶ。自分の子をほめるは大馬鹿ものなれども、真吾は極おとなしき奴じゃ迚、叔母さお菊など大ほめ者也。

同年十二月三日

お六漸のことで、いろはと一二三を上げ今日より書初をならふ。手習ごくきらひ、糸を引たがり候へども、綿もなし……。

同年十二月二十八日

真吾近頃は何でも不審に相成、様々の事を尋ね候。昨夜も寝て居り、海の鳴音を聞付て申には、海は誰が掘て水を入れたんだへ、本から有るのさ、ソフカヘソレデモ誰か掘んけりや深ふならん、町の者でも鍬で掘たろふか抔と申す。又申すには、手のひらは誰が付てくれたんだへ、本から付てあるのさ、フム……右の様な事毎日〳〵クドク聞申候。

一八四七年二月二十二日

お六小僧（三男行三郎、同年一月十九日生）を抱くとてせり合ふには困り入候。真吾日に何十べんとなく、小僧の頬べたへ自分の頬を付てみる。お六負で居り候ても、無理やりせいのびして付やふとする。お六させまへとする。お六でも誰でも抱て居ると、おれに抱しなへと申て取揚。能寝て居るを起して困り入申候。

同年三月七日

おきく昨夕より些とよろしけれど、気分不引立、べったり寝て居り、食を給ると吐気来り困り入候。どふかこふか洗ひのけ致し、お六は小僧起ると負び通して居る。……小僧ちと笑ひ申候。

同年四月六日（お禄八歳）

小僧大分太り頬べただれ下り、色黒く目くる〳〵能笑ふ。

同年六月二日（真吾五歳）

子供らおきくを馬鹿に致し困り入候。小僧次第に大ぶとり、この頃は暮合に一度貰ひ乳致し、昼の内両三度摺り粉為給、夜分はお菊の乳にて沢山有之候。

同年八月三日

小僧大体真裸にて毎朝私の懐へ入り、隣へ行と叔母さ運公ばいつり合て取り上げ、懐へ入て朝飯迄はお隣で遊んで来る。起ると直にお六に負われ候事は避逅の事なり。

同年八月七日

吟味最中大分の地震にて、白洲へ五六人出居候者共、大狼狽不残外へ飛び出し申候。おきくと真吾座敷に居り庭へ飛び出し候よし。真吾未だ地震と申は訳わからず、何か形のあるものと心得居り候哉、地震と申せば、外へ出て見る。おや地震は何処へ行て仕廻ふたろふ、地震が見たくてならんと申候由、今日は上天気冷気にて地震抔思付も無之。

同年十月一日

真吾、小僧つれて洗湯へ行、熱き湯大好き、此頃跡追ひ致し、かくれて役所へ出申候。

同年十一月十日

唐詩選五言絶句空読を教へて遣し候。真吾もはや七ツ斗覚、毎朝夜大声にて唄ふ。可也に覚もよさそふに成候。お六、小僧負ふて遊びに来る。おろして火たつに抱て当り、大元気、六ツ過に負ふて帰り候。真吾無程寝せる。詩三ツ四ツ唄ふ内眠っては仕廻ふ。

同年十二月三十一日

年取用意も出来上り、九ツ時取り可申と存候処、おきく行三郎抱て、足元不見、真

吾の持遊箱の蓋を踏み破り、真吾大おこり、只今元の通り拵ふてくれと申て、だだ起す。色々だましてもすかしても不聞、おきくに頭一つ叩かれ泣き出し、年も取らん、べいも着んでゑゝ抔とぢくね出し、御隣より聞付、運公晩に元の通り拵ふてやるとだまされ、漸きげん直し、九ツ過に家内五人打揃ふて、無滞年を取り申候。

一八四八年一月一日

お六次第に正月遊び面白うなり、内に寄りつかず。

同年一月四日

九ツより助番に出る。行三つれて出暫守り致、お六迎へに来てつれて行。七ツ時交代帰宅、行三運公につれらて粳間へ遊びに行候よし。帰り候処也。行三郎諸人可愛がり、所々より借に参り誰の所へでも行。人不見せぬ故持遊に中〳〵面白き事と見へ候。這ひかゝり候へども、本当に這ひ不申、食べ物は何でも能く給べ、此頃は夜分寝る時、一度摺り粉為呑、その外は乳と餅茶漬等にて少しも小言不申、最早大分育て能く成り候。乳も些とづゝ増て参り候間、大体乳斗りにても宜しく候得ども、生れ落ちより大喰致候故、痩せてはならぬ迚色々世話致し、誠に肥ひ太り気味よき奴也。

同年一月十九日（行三郎一歳）

七ツ前に小僧つれて洗湯へ行。小僧誕生日おきく命拾ひ候日に付、赤まゝ焼き叔母さお呼び申候。

同年一月二十六年

今朝よりお座敷にも素読有之、一寸出て来る。真吾も一同に行、暫見て来る。五ツ前に交代帰宅、真吾おれも書物読みたいと申、夫より大学教へて遣す。去年より空読は出来候へども、字ツキ甚六ケ敷、乍去大悦び度々出て習ふ。真吾書物習ふに付、お六も羨敷成り、百人一首を出し習ふ。是も空読は大分出来候故、忽覚ひ申候。

同年一月二十九日

岡雄左衛門殿昼過に被見に悴鶴尾、渡部代蔵両人とも素読を頼れ、承知致す。真吾大悦び、鶴さもおれも精出して習ふと申。日々三度夜も出てふくし候。当分珍敷と被存候。

同年二月十八日

お六去年来守りに斗りかゝり、手習も見合置候処、此節幸長日に成り、小僧昼寝沢山致し候間、今日より手習ひ初めさせ、真吾もお六の跡にて、いろは習ひ始め、中々世話のやけたる事也。大分暖になり、小僧サツサと這ひ出し、大まめ奴、真吾は病身にて左様の事無之、大相違のことに御座候。

＝おわり＝

（山口女子大学）

本誌定価改訂のおしらせ

諸経費値上りのため、誠に不本意でございますが、本誌の定価を左記の通り改訂させていただきます。

なにとぞご諒承下さいますようお願いいたします。

記

「幼児の教育」一部定価二二〇円

（昭和五十三年一月号より）

以上

昭和五十二年十二月

株式会社フレーベル館

読者各位